

## 「課題解決型高度医療人材養成プログラム」における工程表

申請担当大学名	東邦大学
連携大学名	なし
事業名	都市部の超高齢社会に挑む看護師養成事業

### ① 本事業終了後の達成目標

本事業終了後の達成目標	
達成目標	都市部の超高齢社会に対応するケア提供者を養成するための、「いえラボ」という「まち」の中にある本物の「いえ」の特徴を生かした教育プログラムを開発する。養成する人物像を以下に示す。 1. 「いえ」という日常的な場での学びにより、学ぶ者がケア対象の高齢者及びその家族の側(がわ)に立つことが可能となり、くらしの中の現実的なケアプランを考え実践できる。 2. 「いえ」という日常的な場でのコミュニケーションにより、ケア提供の場が異なるケア提供者たちが、くらしの中の療養について議論し、お互いを理解できる。 3. 2によりケア提供の場が異なるケア提供者たちとの情報共有方法を自ら考え実践し切れ目のないケアを目指すことができる。 4. 都市部という特徴を生かした「いえラボ」の有効活用について提案、発信することができる。

### ② 年度別のインプット・プロセス、アウトプット、アウトカム

		H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
		①いえラボゼミ開催(講師対象)6回 受入れ60名 ②いえラボフォーラム開催1回 受入れ200名 ③包括ケア実感プログラム検討(ワーク5回 推進委員会2回) ④包括ケアの「根拠」となる生活機能アセスメントプログラム検討(ワーク5回 推進委員会2回) ⑤療養環境デザイン実習検討(ワーク5回 推進委員会2回) ⑥公式サイト検討(ワーク5回 推進委員会2回)	①いえラボゼミ開催8回 受入れ80名 ②いえラボフォーラム開催1回 受入れ200名 ③包括ケア実感プログラム受入れ20名 ④包括ケアの「根拠」となる生活機能アセスメントプログラム受入れ10名 ⑤療養環境デザイン実習実施100名 ⑥創造性指導者育成プログラム検討(ワーク5回 推進委員会2回) ⑦医療ケアチーム育成プログラム検討(ワーク5回 推進委員会2回) ⑧緩和ケア連携プログラム検討(ワーク5回 推進委員会2回) ⑨世代横断的包括ケア特論検討(ワーク5回 推進委員会2回) ⑩地域住民向け健康講座検討と開催(検討:ワーク5回・推進委員会2回、開催:2回) ⑪いえラボ近隣住民へヒアリング調査検討(ワーク5回・推進委員会2回)と実施 ⑫大学附属病院スタッフへ包括ケアに対する調査検討(ワーク5回・推進委員会2回)と実施 ⑬公式サイトの定期的な更新 ⑭学会等の参加並びに研究発表の検討(ワーク5回・推進委員会2回)と実施	①いえラボゼミ開催5回 受入れ50名 ②いえラボフォーラム開催1回 受入れ200名 ③包括ケア実感プログラム受入れ20名 ④包括ケアの「根拠」となる生活機能アセスメントプログラム受入れ10名 ⑤療養環境デザイン実習実施100名 ⑥創造性指導者育成プログラム受入れ10名 ⑦医療ケアチーム育成プログラム受入れ10名 ⑧緩和ケア連携プログラム受入れ10名 ⑨世代横断的包括ケア特論検討(ワーク5回 推進委員会2回) ⑩地域住民向け健康講座開催5回 25名 ⑪いえラボ近隣住民へヒアリング調査実施 ⑫大学附属病院スタッフへの包括ケアに対する調査実施 ⑬公式サイトの定期的な更新 ⑭学会等の参加並びに研究発表の検討(ワーク5回・推進委員会2回)と実施 ⑮小中学生向けいえラボ体験プログラム検討と開催(検討:ワーク5回・推進委員会2回、開催1回)	①いえラボゼミ開催5回 受入れ50名 ②いえラボフォーラム開催1回 受入れ200名 ③包括ケア実感プログラム受入れ20名 ④包括ケアの「根拠」となる生活機能アセスメントプログラム受入れ10名 ⑤療養環境デザイン実習実施100名 ⑥創造性指導者育成プログラム受入れ10名 ⑦医療ケアチーム育成プログラム受入れ10名 ⑧緩和ケア連携プログラム受入れ10名 ⑨世代横断的包括ケア特論受入れ5名 ⑩地域住民向け健康講座開催5回 25名 ⑪いえラボ近隣住民へヒアリング調査実施 ⑫大学附属病院スタッフへの包括ケアに対する調査実施 ⑬公式サイトの定期的な更新 ⑭学会等の参加並びに研究発表の検討(ワーク5回・推進委員会2回)と実施 ⑮小中学生向けいえラボ体験プログラム受入れ10名 ⑯教育者と学習者をつなげるICT開発実用性評価実施 ⑰事業終了後の継続計画の検討(ワーク5回 推進委員会2回)	①いえラボゼミ開催5回 受入れ50名 ②いえラボフォーラム開催1回 受入れ200名 ③包括ケア実感プログラム受入れ20名 ④包括ケアの「根拠」となる生活機能アセスメントプログラム受入れ10名 ⑤療養環境デザイン実習実施100名 ⑥創造性指導者育成プログラム受入れ10名 ⑦医療ケアチーム育成プログラム受入れ10名 ⑧緩和ケア連携プログラム受入れ10名 ⑨世代横断的包括ケア特論受入れ5名 ⑩地域住民向け健康講座開催5回 25名 ⑪いえラボ近隣住民へヒアリング調査実施 ⑫大学附属病院スタッフへの包括ケアに対する調査実施 ⑬公式サイトの定期的な更新 ⑭学会等の参加並びに研究発表の検討(ワーク5回・推進委員会2回)と実施 ⑮小中学生向けいえラボ体験プログラム受入れ10名 ⑯教育者と学習者をつなげるICT開発実用性評価実施 ⑰事業終了後の継続計画の検討(ワーク5回 推進委員会2回)
インプット・プロセス(投入、入力、活動、行動)	定量的なもの					

	<p>定性的なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボゼミ講師:デザイナー, 嶺町民生児童委員, 嶺町特別出張所所長, 建築家</li> <li>・プログラム講師陣が「いえ」と「まち」を学ぶ</li> <li>・プログラム講師陣が、受講者が「いえラボ」で学ぶ意義を考える</li> <li>・事業展開施設と地域の人々への周知を図る</li> <li>・いえラボの環境調査を実施する</li> <li>・いえラボの家のしつらえ(生活機能支援備品、在宅用医療機器)</li> <li>・公式サイト内容検討</li> </ul>	<p>定性的なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボゼミ講師:検討中</li> <li>・いえラボゼミでの学びの内容</li> <li>・事業展開施設と地域の人々へ活動の周知を図る</li> <li>・計画したプログラムの実施</li> <li>・「まち」の中の「いえ」でくらす高齢者を支えるための専門的議論ができる</li> <li>・いえラボの家のしつらえ(生活機能支援備品、在宅用医療機器)</li> <li>・公式サイト内容検討</li> <li>・学会等の参加並びに研究発表の内容検討</li> </ul>	<p>定性的なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボゼミ講師:検討中</li> <li>・いえラボゼミでの学びの内容</li> <li>・事業展開施設と地域の人々へ活動の周知を図る</li> <li>・計画したプログラムの実施</li> <li>・「まち」の中の「いえ」でくらす高齢者を支えるための専門的議論ができる</li> <li>・いえラボの家のしつらえ(生活機能支援備品、在宅用医療機器)</li> <li>・公式サイト内容検討</li> <li>・学会等の参加並びに研究発表の内容検討</li> <li>・次世代に受け渡すための評価としてグッドデザイン賞応募</li> </ul>	<p>定性的なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボゼミ講師:検討中</li> <li>・いえラボゼミでの学びの内容</li> <li>・事業展開施設と地域の人々へ活動の周知を図る</li> <li>・計画したプログラムの実施</li> <li>・「まち」の中の「いえ」でくらす高齢者を支えるための専門的議論ができる</li> <li>・いえラボの家のしつらえ(生活機能支援備品、在宅用医療機器)</li> <li>・公式サイト内容検討</li> <li>・学会等の参加並びに研究発表の内容検討</li> <li>・教育者と学習者をつなげるICT開発と評価内容検討</li> <li>・次世代に受け渡すための評価としてキッズデザイン賞応募</li> <li>・事業終了後の継続計画の内容検討</li> </ul>
アウトプット (結果、出力)	<p>定量的なもの</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①参加者数39(急性期看護師16,訪問看護看護師2,回復期看護師1,介護老人施設看護師2,介護老人施設介護士3,看護教員11,大学院生2,大田区職員1,デザイナー1)</li> <li>②参加者数</li> <li>③検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>④検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>⑤検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>⑥検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> </ol>	<p>定量的なもの</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①参加者数</li> <li>②参加者数</li> <li>③修了者数</li> <li>④修了者数</li> <li>⑤修了者数</li> <li>⑥検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>⑦検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>⑧検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>⑨検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>⑩地域住民向け健康講座参加者数(どのような方たちが)</li> <li>⑪いえラボ近隣住民へのヒアリング調査結果</li> <li>⑫大学附属病院スタッフへの包括ケアに対する調査結果</li> <li>⑬公式サイトアクセス数</li> <li>⑭学会等の参加並びに研究発表の実施回数</li> </ol>	<p>定量的なもの</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①参加者数</li> <li>②参加者数</li> <li>③修了者数</li> <li>④修了者数</li> <li>⑤修了者数</li> <li>⑥修了者数</li> <li>⑦修了者数</li> <li>⑧修了者数</li> <li>⑨修了者数</li> <li>⑩地域住民向け健康講座参加者数</li> <li>⑪いえラボ近隣住民へのヒアリング調査結果</li> <li>⑫大学附属病院スタッフへの包括ケアに対する調査結果</li> <li>⑬公式サイトアクセス数</li> <li>⑭学会等の参加並びに研究発表の実施回数</li> <li>⑮参加者数</li> <li>⑯検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>⑰検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> </ol>	<p>定量的なもの</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①参加者数</li> <li>②参加者数</li> <li>③修了者数</li> <li>④修了者数</li> <li>⑤修了者数</li> <li>⑥修了者数</li> <li>⑦修了者数</li> <li>⑧修了者数</li> <li>⑨修了者数</li> <li>⑩地域住民向け健康講座参加者数</li> <li>⑪いえラボ近隣住民へのヒアリング調査結果</li> <li>⑫大学附属病院スタッフへの包括ケアに対する調査結果</li> <li>⑬公式サイトアクセス数</li> <li>⑭学会等の参加並びに研究発表の実施回数</li> <li>⑮参加者数</li> <li>⑯検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> <li>⑰検討のワーク, 推進委員会開催回数</li> </ol>
	<p>定性的なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボゼミ講義内容「人を動かすデザインの力」「大田区嶺町とは」「室内環境」「生活と照明」「高齢者住宅とは」「道具を知る、体験する」</li> <li>・プログラム講師陣が「いえ」と「まち」を知る</li> <li>・次年度開始プログラム完成</li> <li>・公式サイト公開</li> </ul>	<p>定性的なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各開講ゼミ、プログラムなどの内容</li> <li>・各開講ゼミ、プログラムなど参加者の意見・感想の集約</li> <li>・各開講ゼミ、プログラムなど運営者の意見・感想の集約</li> <li>・各調査などの結果の集約</li> <li>・集約結果をもとに次年度に向けた調整</li> <li>・次年度開始プログラム完成</li> <li>・公式サイト公開</li> <li>・学会等の参加並びに研究発表の内容</li> </ul>	<p>定性的なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各開講ゼミ、プログラムなどの内容</li> <li>・各開講ゼミ、プログラムなど参加者の意見・感想の集約</li> <li>・各開講ゼミ、プログラムなど運営者の意見・感想の集約</li> <li>・各調査などの結果の集約</li> <li>・集約結果をもとに次年度に向けた調整</li> <li>・次年度開始プログラム完成</li> <li>・公式サイト公開</li> <li>・学会等の参加並びに研究発表の内容</li> </ul>	<p>定性的なもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各開講ゼミ、プログラムなどの内容</li> <li>・各開講ゼミ、プログラムなど参加者の意見・感想の集約</li> <li>・各開講ゼミ、プログラムなど運営者の意見・感想の集約</li> <li>・各調査などの結果の集約</li> <li>・集約結果をもとに次年度に向けた調整</li> <li>・次年度開始プログラム完成</li> <li>・公式サイト公開</li> <li>・学会等の参加並びに研究発表の内容</li> <li>・事業終了後の継続計画立案</li> </ul>

アウトカム (成果、効果)	定量的なもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボゼミ講師参加率</li> <li>・いえラボフォーラム参加率</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学附属病院で包括ケアの実践モデルとなる看護師受講率</li> <li>・定員に対する応募率</li> <li>・公式サイトアクセス数増加率</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学附属病院で包括ケアの実践モデルとなる看護師受講率</li> <li>・定員に対する応募率</li> <li>・公式サイトアクセス数増加率</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学附属病院で包括ケアの実践モデルとなる看護師受講率</li> <li>・定員に対する応募率</li> <li>・公式サイトアクセス数増加率</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学附属病院で包括ケアの実践モデルとなる看護師受講率</li> <li>・定員に対する応募率</li> <li>・公式サイトアクセス数増加率</li> </ul>
	定性的なもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラム講師陣が、受講者が「いえラボ」で学ぶ意義を考えられる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボのある地域の方々に受け入れられる</li> <li>・プログラムの成果と課題が明確になり次年度に向けた調整ができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボのある地域の方々に受け入れられる</li> <li>・プログラムの成果と課題が明確になり次年度に向けた調整ができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボのある地域の方々に受け入れられる</li> <li>・プログラムの成果と課題が明確になり次年度に向けた調整ができる。</li> <li>・事業終了後の継続の方向性が見いだせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いえラボのある地域の方々に受け入れられる</li> <li>・プログラムの成果と課題が明確になり次年度に向けた調整ができる。</li> <li>・事業終了後の継続方法が明確になり次年度に向けた調整ができる</li> </ul>

### ③ 推進委員会所見に対する対応方針

要望事項	内容	対応方針
①	事業期間中は、PDCAサイクルによる工程管理を行った上で、全国の模範となるような体系的な教育プログラムを展開すること。その際、履修する学生や医療従事者等のキャリアパス形成につながる取組や体制を構築すること。	計画実施のチェック機構として学外の有識者を含めた評価委員会を設けた。また、体系的な教育プログラムとなるよう学部及び大学院のカリキュラム責任者、附属病院教育責任者、実習施設(回復期リハ、老人福祉施設、訪問看護)教育責任者が事業推進メンバーとなり、各プログラムのプロセス、結果、成果を評価する。さらに、これら各部門を有効的につなげる役割を看護キャリア支援センターが担い、生涯教育としての体制の構築を目指す。
②	事業の実施に当たっては、学長・学部長等のリーダーシップのもと、責任体制を明確にした上で、全学的な実施体制で行うこと。また、地域医療の充実やチーム医療の推進の観点からも、学外の有識者にも積極的に参画いただき、事業の構想を実現できる体制を構築すること。	学長指示のもと看護学部長が事業責任者となり、事業の監督に関わる部門として包括ケア推進教育部会を立ち上げた。さらに、具体的なプログラムを企画・運営する事業推進委員会には学外の実習施設の教育担当者も含まれている。また、企画のための学習会として学外の有識者を講師に迎え「いえラボゼミ」を月1回程度開催し、講師とともに学び合う機会を多様な形で設け事業の構想の実現を目指す。
③	事業期間終了後も各大学において事業を継続することを念頭に、具体的な事業継続の方針・考え方について検討すること。また、多くの大学に自らの教育改革を進める議論に活用してもらうため、選定大学が開発・実践する教育プログラムから得られる成果等を、可能な限り可視化した上で、地域や社会に対して分かりやすく情報発信すること。	プログラム受講者が企画運営者となるサイクルを円滑に回せるようにするために、経過を様々な媒体で記録することを検討する。また、本事業を継続させるためには、いえラボの有用性を示し、「いえラボ」の家賃を含む維持費の捻出がキーになる。そのためには「いえラボ」の存在がどのように有益か、活用方法、将来性を含め様々な方々に発信することが重要であり、まずは地域の医療施設を含む関係部門への発信、学会等での発表は当然のこと、住民、地域企業へのわかりやすい定期的な情報発信を目指す。

④ 推進委員会からの主なコメントに対する対応方針

推進委員会からの主なコメント(改善を要する点、留意事項)	対応方針
<p>多彩な教育プログラムで開設予定であるが受入れ人数が各プログラム数名である。シビックプライドを持った看護師を継続的に育てる仕組みづくりであるからには、特に卒前教育が2名では評価がしづらく見直しが望ましい。</p>	<p>得られた「いえラボ」となる物件の広さ、間取りから、ここでの可能な講義、演習人数は15名ほどとなることがわかった。したがって、「いえラボ」を活用する卒後プログラムはそれぞれ申請時より5名ほど増やす予定である。さらに、卒前教育のプログラムは3年の必修科目である高齢者看護学実習で展開することに計画修正をする。そうすることで2名から100名程度／年となる。</p>
<p>挑戦的プログラムであるが、この件に関する芽だしの実績が不明であり、実効性に課題がある。</p>	<p>10月から事業運営者等(学部、附属病院、学外実習施設教育担当者、約15名)で毎月「いえラボ」においてゼミを実施してきた。「いえラボ」の意義を共有するテーマ「いえ」を知る、設える(しつらえる)でデザイナーや建築家、地元民生委員などを講師に迎え、共に学ぶことでそれぞれの場を超えた一体感が生まれつつある。特に地元住民である民生委員を迎えた際、教室での講義と異なりリビングに招かれた客人という雰囲気が話す側(がわ)、聞く側(がわ)の壁を低くした印象を持った。大学や病院ではなくマンションの一室であることの意義を参加者の言動等から評価していく予定である。</p>
<p>「いえラボ」における活動内容がわかりにくい。例えば在宅用人工呼吸器の大きさと部屋の広さとの相互性を確認するために極めて短期間、呼吸器の借用等を行うのか、又は諸物品のユニバーサルデザインの変更を提案する取り組みであるのかなど。人材養成を目的とした本事業趣旨との一致性もわかりにくい。また、年に2名の学生への教育のために部屋を借りることは効率性が低いと感じられる。</p>	<p>「いえラボ」の有用性を具体的に示すことが本事業の役割でもある。各プログラムでの「いえラボ」活用において企画者及び受講者には常に「これは大学の実習室ではできないことか」ということを投げかけプログラム評価をしていく予定である。現時点では、生活の連続性を生かした教育プログラムを検討している。丸ごとの家であることから例えば「夜間の排せつをアセスメントすることだけをとっても動作、寝室とトイレの室温変化に対する身体的影響、照明の変化による空間認知及び動作への影響、更に汚染した下着をどう処理するのかなどをリアルに体験し、生活機能アセスメントの必要性を実感するプログラムを検討している。「いえラボ」は「ケア対象者のより詳細な生活を知りたい」という動機づけの役割が大きいと考えている。学部学生の人数については上記で対応策を示した。</p>
<p>達成目標として研修評価が表記されているため、事業評価を示されるとよい。</p>	<p>いえラボという場を活用して、生活をする人としてのケア対象者へ現実的なケアプランを考案し実践できる人材を養成できたかが主たる事業目標である。また、様々な場で看護・介護教育に関わる者たちが「いえラボ」という場に結集して、ケア対象者の近所付き合いを含む暮らしを意識しながらプログラムを企画・運営していく過程そのものが、互いのケアの場の違いを理解し信頼関係を育むコミュニケーションとなる。そして、そこで構築された信頼関係こそが切れ目のないケアとなっていくことが本事業の目標である。さらに、そのような関係性を身近にいる地域住民が見て、知り、関わることで高齢になっても、病を持って自立した日常生活の継続は不可能ではないと考える一助になることも本事業では目指しており、これらも事業評価につながると考える。</p>
<p>「いえラボ」は実験や体験の場としては優れているが、地域の暮らしを支えるためには、多様な住宅環境と実際にそこで生活する人から学ぶことが効果的で重要だと思われる。</p>	<p>教育プログラムを開講していないときはいえラボを地域住民に「いえラボサロン(仮)」「いえラボとしよつ(仮)」として開放する予定である。「いえラボ」家主、地元民生委員、町内会の協力を得ながら気楽に立ち寄れる場となることを目指し、そこから多様な暮らしを学ぶ手掛かりとする。</p>
<p>7つの教育プログラム・コースを計画しているが、各コースの関係が明確になっておらず、また、「いえラボ」が必要な根拠も十分示されているとはいえない。</p>	<p>学部学生には「療養環境デザイン実習」を全員に履修させ素地(きじ)を作る。そして、卒後の現職者向けの5つのプログラムが実践的学び直しとなり、基礎教育と自身の経験知を基盤に履修する科目としている。大学院での開講予定のプログラムは卒後の5つのプログラムの修了を前提とする予定である。リアルな生活空間を提供する「いえラボ」はこの実践的学び直しを可能にするために不可欠な場となることを目指し、教育プログラムを構築していく。</p>